



審査員特別賞
リリー・フランキー賞

まさかのさかあがり

前原 一心

十月の初めのある日

学校からのおたよりを母に見せた。

母は熱心に読んでから、

「算数は三角形の面積かあ、もうそんな所まで習ったんやねえ。」

「あらら体育は、とび箱と鉄棒やね、とうとう、さかあがりやね。」

昨年の鉄棒の時間も逆上がりが出きずについて通知表はそこだけ「だいたいできる」という悲しい記憶がよみがえった。

三つ年上のいとこは、中二の今でも逆上がりが出きない。

中学では、逆上がりがないから心配せんでいいよと悲しい励ましの言葉をくれた。

ぼくもそんなに気にしてなかったけど、一学期の成績があんまり良くなかった手前、二学期はどうしても「だいたいできる」では困ると思った。

母が、

「明日公園に行ってみよっか？」

と言うので、近くの公園に行ってみた。

久しぶりの鉄棒は、かたくて冷たかった。鉄さびで少し気持ち悪くて汚れたらいやだなと少し思った。

はんどうをつけてえいとやってみた。

「はあぁー。」

母は、あまりの出来なさに少し笑っていた。次こそは、

「ハイー・イチ・ニイのエイー。」

やっぱり出きなかった。

「全然、足が上ってないやん。」

わかってる、ぼくわかってるから。

夜、母が

「ねえ、パパのたんじょう日のプレゼント何にしようか？何か考えよう？」

ぼくはとっさに、

「てつぼうで逆上がりを出きるようになることにする。」

と言ってしまった。それはいいねと母は賛成してくれた。その日から内緒の二人の秘密特訓が始まった。

期限は、十一月五日だ。

十月の夕方は日が暮れるのが早くて、学校が終って家に帰って宿題をしたらもう暗くなっていた。

母は夕食の支度の途中でいつも公園に連れて行ってくれた。

すぐ近くの公園では、友だちがいるのでとなり町の公園をいくつもさがして、毎日練習した。鉄棒もない公園も多くてびっくりした。

ある日いい公園を見つけたと思ったらとなりが保育園で三十人の視線をいつ気にうけたり別の公園では、一年生位の子がおいしいとか、足が上がってないとか言っていて、最後には、

「わたしできるよ。」

となりでグルグル逆上がりをはじめた。少しくやしかったけど、できるようになって見せると思った。

母はぼくがあまりにできないのでネットでいろいろ調べてくれて、脇をしめるとか、鉄棒から胸を離さないとか、タオルを使ってアシストするとか、できた人のビデオを見てイメージトレーニングするとかした。

毎週火曜日にスイミングがあるからそれ以外を毎日練習した。

十月の終り、自分に腹が立つてきた。

「こんながんばって、友だちとも遊ばんでいるのにどうしてできない。」

くやくして土をカいっばいけった。
できない、どうしてもできない。

くやしい、タオルを使ったらでけるのに外すとできない。泣きそうになった。

母は、今日もだめかという顔で「もう帰るよ。ごはん作らんといかん。」と言って車に戻った。ぼくは、くやしなくて、まっ暗になった公園で一人で練習した。ふと車の方を見ると母がずっとこつちを見ていた。

もうすぐ十一月だと思うとあせりがあってもうムリかもというあきらめもあった。

でも、母は、それでも、毎日毎日、ぼくにつきあってくれて、「ああ、おしい」とか「足が上がってないよ」とか、「あーもともどった」とか、色々言ってくれる。うれしいけどさかかった。がんばっているのに「まだ全然だめ」と言われるとやる気なくなるからだ。ブランコに乗り「あーひさしぶりのブランコだー」と言いながらぼくから離れた。

すぐに暗くなってきたけど、今日は、パパが仕事で遅くなるからまだやった。

イチ、ニイ、ブーン、力をこめて、土を強くけつてう

でを引きつけがんばった。足が暗い空の方へと行ったそのとき3秒くらい止まった。反対の方へゆっくり回った後、

「出来た。」

ブランコから母が走ってきて

「できたやん。」

おもわず一回だけあった。夢みたいだった。もう一回やってみてと言われ、やったけどダメだった。でも一回は出来たんだ。その日はおいしいケーキを買ってお祝いした。

次の日もやってみた。出来ない。三十回して一回ぐらいだった。

十一月五日、父の誕生日だ。仕事が終わった父を母と迎えに行って近くの公園までつれていった。一回目ズルッとすべっただめで2回目だめで最後の一回、一二三でやったけど足が上まで上がらず、落ちそうなしゅんかん父が両手でひょいと回してくれた。

「すごい出きたやないか。」

少しずるい気もしたけどパパが喜んでくれてうれしかった。

本当に本当にうれしかった。それからしばらくして、体育の時鉄棒のテストをしますと先生がとつぜん言われた。急だったのでぼくの心ぞうはドキドキした。

名前をよばれて、イチ、ニイ、サン、クルツ。

「ヤッター、出来た。」

苦しかったけどぼくは、この逆上がりのことを一生わすれないだろう。

出来なかったことが出来た喜びも忘れないだろう。